

“がっこう”か“学校”か

井深：その覚えさせる方法をひとつ、具体的に……。

石井：その方法は、今から考えますと、必ずしもよくないですよ。

井深：あ、そうでしたか。しかし、実験ですから……。

石井：小学校の1、2年生が学習する漢字は、基礎的な漢字で、多くは、木とか、山とか、川とかという、象形的なものです。それを元の絵に関連させて教える、ということをやったんです。

井深：あ、象形的にね。

石井：ところが、幼児には、その必要がないのですね。

井深：それは、大人の方には必要なんですね。

石井：そうなんです。大人はそうしないと覚えにくいんですが、幼児にはそうする必要は全くないんです。

井深：あ、それをあとからわかれたんですね。それは非常に貴重なところですからね。パターンということじゃなかったんですね、最初のころは。

石井：そうなんです。今、大人のために『連想式漢字記憶術』という本を出していますが、その“大人用のやり方”を、息子にやらせてみたわけです。まあ、それでもとにかくどんどん漢字を覚えて……小学校に入学するころには、もう、5、6年生の本でも読める、

というようになっていました。

井深：ほう……。

石井：それと同時に、私が指導に行っている小学校……八王子にはそのころ9つの小学校があったんですが、そのうちの2、3の小学校の1年生担任の先生に、これ、校長の了解を得て「最初から漢字をぶつけてみる」ということを実験してもらったんです。例えば、“がっこう”と教えないで、最初から“学校”って教えるんです。そういうことを実験してもらって、一年たってその報告を聞きましてところ、「かな書きの場合よりよい」という結果が出たんです。

井深：ええ、ええ。

石井：それで私、これはどうしても自分で実際にやってみたい、という気持ちが強くなりましたので、昭和28年に指導主事をやめて、1年生の担任になりました。

井深：小学校の？

石井：はい。漢字教育は、“1年生は30字読める”ようにするというのが、当時の文部省指導要領に示された目標なんです。その10倍の300字くらいをねらってやってみました。そしたら、私のような、小学校教師の経験の全くない、未熟な者でさえ……しかも当時は、二部授業をやっていまして、正規の授業の半分しか

出来なかったのに、「学級平均 220 字読める」というよい結果が出ました。

井深：でも、国語の時間だけでしょう？

石井：はい。勿論そうです。それも、国語の時間は、漢字だけではありません。いろいろ学習することがあります。ただ、「最初から漢字で表記した形で与える」という原則を主にしました。1 年生は、いくら漢字が多くても平気なんですね。このクラスを 3 年間持ちましたが、漢字力は 6 年生以上になりました。作文を見た 6 年生の先生が「6 年生よりもずっと漢字が多く使われている」と言って驚くほどでした。

井深：それは、初めは、“読む”のだけですか。(井深注 = 文部省の「読み書き同時教育」に対して、石井方式は「読み書き分離」の“読み方先習教育”を主張しています)

石井：読みと書きと一緒にやっていました。

井深：両方一緒に？

石井：ええ、一緒にやりました。「読み書き分離」という考えが出たのは、それからずっと後なんです。

井深：ああそうですか。はい。

石井：それから、一年生に戻って、今度は指導要領通りのやり方...
...つまり、最初は仮名で学習させ、あとで漢字を学習させる、と

いうやり方をやってみました。最初仮名で学習した子供たちが、漢字を学習する時、どういう反応を示すか。最初から漢字で学習していた子供たちと、どんなに違った反応を示すか。それを自分の目で直接確かめてみたかったからです。昭和 31 年から 33 年にかけて指導してみてわかったことは、「漢字書きすべき言葉を、先に仮名で学習すると、それが漢字学習の妨げになる」ということでした。昔も今も、小学校の先生がみんな悩んでいることに、こういうことがあります。「漢字を習って、それが書けるようになっても、作文やノートにはなかなか使えるようにならない」ということです。つまり、テストすれば書ける漢字が、作文に、は使われない、ということです。

井深：ああ、そうですか。ほう.....。

石井：「テストすれば書けるのに、作文にはなぜ使わないのか」これは、私が指導主事当時も、よく受けた質問です。

井深：身についていない、ということでしょうかね。

石井：ええ。まあ、そういうことにはなりますが、それは“反復練習”の不足に原因するものではないんです。ところが、「それは、まだよく身についていないためだから、もっと練習しなさい」ってなことを言って済ましているんですね。

井深：は一ん。

石井：ところが、そうじゃないんですね。先に仮名書きで学習させますと、それがその言葉のパターンになって頭の中に納まってしまいますから、あとで学習した漢字は、身につかないんです。また、仮名のパターンをこわして漢字に置き換えることは、最初から漢字を学習するのに比べてなかなかむずかしいことなんです。

井深：歩くことがちゃんと出来るようになったら、スケートはむずかしい。(井深注 = アメリカの心理学者マグロウの実験によると、まだ、よく歩けない幼児に、歩く練習と同時に、ローラースケートで滑る練習をさせると、歩くことと滑ることとが相互に影響し合って、どちらも上達する。ところが、歩けるようになってから滑る練習をさせると、歩けるようになったことが、滑ることの練習の妨げになって上達しなかった、と言う)

石井：そうです。そういうことなんです。

井深：歩くことと、スケートと、同時にやりゃあ、どちらも身につくんですがね。

石井：ええ、ええ。私、そのマグロウの実験を知った時に、これは私の主張(言葉と漢字とを一緒に学習させるという)の理論的な裏づけに役立つなあ、と思いました。

井深：今われわれが言っている「日本語が定着しちゃったら、外国語

は遅すぎる」んだという.....それと全く軌を同じくしますね。

石井：そうなんです。日本の教育というのは、明治以来、仮名で読み書きするという習慣をまずつけてしまうことなんです。そうすると、その学習に成功すればするほど、漢字学習は困難なものになるんです。

井深：“難しさ”の意味というものが、大人なりの解釈で扱われていて、子供にとって、何が難しいか、迷惑か、ということは、ひとつも考えていない(笑)。

石井：ええ、そうなんです。

井深：仮名が定着しちゃうと、後から漢字を入れても、漢字に対する抵抗力ができちゃう、とそういう言い方をしてもいいですね。初めから漢字をやって、仮名なんかひとりで覚えるんだ、と放っておいたっていいんだ。漢字の方がノルマルなんだ。ということになっておけば一生懸命字を覚えるようになる、と。

石井：ええ。ですから、最初に社会の標準的なものを教える、ということですね。どこの学校だって、“がっこう”なんていう看板を掲げてる所はありませんよ(笑)。にもかかわらず“がっこう”という書き方を教えているというのは、私、大変な間違いだと思っんです。私はそのことを、実際の指導によって確かめた、ということなんですよ。